勝瑞発掘だより

『三好氏と一向宗』 vol.39

～一向宗（浄土真宗・真宗）～

浄土真宗は、鎌倉時代中期に親鸞によって開かれた仏教の宗派の一つで『阿弥陀如来』を唯一無二とし『南無阿弥陀仏』と念仏を唱えることで、すべての人が極楽浄土へ成仏できるという教えです。信者は門徒と呼ばれます。

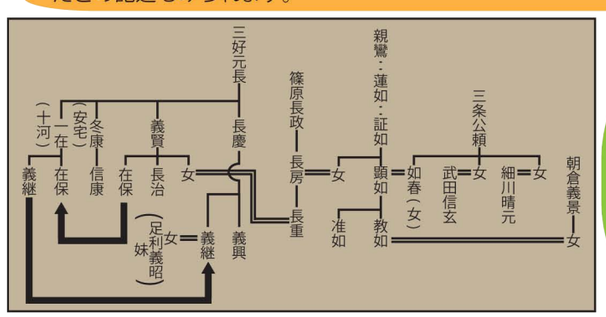
戦国期には信仰や利益などを守るため、支配者層に武装蜂起しました。また、本願寺（総本山）の指令をうけて政治闘争にも介入し、一大政治勢力となります。これは一向一揆と呼ばれ、守護大名を倒し一時期、自治を獲得した加賀などが有名です（ただ本願寺には僧兵は存在せず、自前の軍は擁していませんでした）。後に信長と対立し浅井・朝倉・武田・毛利・三好家などと結び信長包囲網を形成していきます。一向一揆も伊勢などで信長と戦い、当時の総本山である石山本願寺では石山合戦と呼ばれる抗争を 1570 ～ 80 年に渡り続けます。門徒である紀伊の雑賀衆はこのとき中心兵力として活躍しました。雑賀衆は勢力圏を接していた根来衆（根来寺〔新義真言宗〕の僧兵を中心とした集団で、鉄砲の生産地でもあったとされる）と関係が深く、時には結び、時には対立しました。鉄砲の技術に長け、鈴木重秀（雑賀孫市？）らが有名です。1580 年に門主・顕如は信長に屈服し本拠・石山本願寺を退去しますが、このとき、子の教如はしばらく石山本願寺に残り抗戦を続けました。石山本願寺を退去した顕如は雑賀衆のもとに身をよせますが、1591 年豊臣秀吉より寺地を寄進され京都に本願寺を建立（現・西本願寺）しました。ただ 11 世・顕如の没後、長男・教如が一時期、後継となりますが、三男・准如との間で後継争いがおき、准如が継ぐこととなります。後に教如は 1602 年に徳川家康より寺地を寄進され東本願寺を建立し分派します。准如が継いだのは石山合戦時に徹底抗戦派であった教如を秀吉が嫌ったためともいわれ、家康が教如に寺地を寄進したことは一向宗の力を削ぐ為ともいわれます。家康も三河時代から一向一揆に悩まされていました。

三好元長・長慶と一向宗

俗に堺幕府と呼ばれる中で、管領・細川晴元と三好元長が対立していきます。1532 年 3 月、劣勢であった晴元は本願寺の 10 世・証如と結び、摂津、河内、和泉などで一向一揆が巻き起こり、元長方を攻めました（元長が一向宗と対立していた法華宗を庇護していた）。そして 10 万を超えたとも言われる一向宗門徒に攻められ堺の顕本寺（法華宗）で元長は自害することとなります。ただ、細川晴元は一向宗を恐れ、1532 年 8 月には法華宗・比叡山らと山科本願寺（一向宗の当時の本山）を攻め壊滅させます（天文法華の乱）。この後、一向宗の本拠が摂津の石山御坊へと移り石山本願寺となります。晴元が石山本願寺を囲むにいたって、証如は元長の長子・三好長慶（当時 12 歳）に幕府との調停を求めます。1533 年、阿波から大坂に入った長慶により、幕府と一向宗との和議がむすばれました。ただ一向一揆は証如の思惑とは異なり、その後も続き、それを平定していく中で長慶は畿内での勢力を回復していったともいわれています。

三好義賢と一向宗

三好元長の子の三好義賢が戦死した泉州久米田の戦い (1562 年) にも、敵方の畠山高政（紀伊国守護）側に根来衆・雑賀衆が出陣していました。義賢は鉄砲で撃たれ亡くなったともいわれています。この戦いで、雑賀衆の鈴木重宗が戦死したとの記述もみられます。



雑賀衆

雑賀衆は紀伊国北部（現・和歌山市周辺）の国人衆などの集まりで、雑賀五組と呼ばれる共同体が連合した組織で、鉄砲技術に長けており、紀ノ川河口付近も抑え、水運にも関わっていたようです。また傭兵集団としての一面も持っていました。その中に鷺森御坊によった一向門徒を中心とした集団がおり、雑賀衆のすべてが門徒という訳ではありませんでした。

三好三人衆と雑賀衆

三好長慶の死後、三好義継の後見として実権を握った三好三人衆（三好長逸・政康、岩成友通）は、足利義昭をたて畿内へ進出した織田信長と争います。一時、畿内を逃れた三好の勢力は 1570 年に反抗に討ってです。このとき信長側にも、三好側にも雑賀衆が加わっています。三好側に加わった雑賀衆は安宅家と関係が深かったことによると考える説もあります。

篠原長房と雑賀衆

1560 年に三好義賢が勝瑞から高屋城へ移ると、阿波の実質的な統治は篠原長房に任せられました。長房は義賢が戦死した久米田の戦いにも参加していました。ただ、長房は同族の篠原自遁の讒言により、細川持隆の子・眞之、義賢の長子・三好長治らに攻められ上桜城（吉野川市川島町）で敗死します (1573 年)。この合戦には、傭兵として攻撃側に雑賀衆も参加しています。（紀州雑賀鉄砲千挺惣兵三千人を加勢す『阿州古戦記』）

こぼれ話・その一

以前の発掘だよりで紹介した中富川の合戦で三好に忠誠を尽くして死んだ赤沢信濃守宗伝はこの上桜の合戦では、篠原長房との繋がりが深かったため、板西城を三好長治らに攻められ、投降したとする話も残っています。

また、後日談として赤沢信濃守が、上桜合戦で死した篠原長房らを供養するため高野山に三年間こもったとする話も残っています。

『昔阿波物語』

こぼれ話・その二

篠原自遁の讒言により篠原長房が攻め滅ぼされた背景には大形殿（小少将）と呼ばれる女性の存在があったとされます。もともとは細川持隆の側室でしたが、持隆が三好義賢に討たれると、その側室に、義賢の死後は篠原自遁に身を寄せたと言われています。このことで長房と自遁が対立し、上桜合戦へと、つながっていったともいわれています。大形殿は実在したかも定かではありませんが、板野郡の西条東城主岡本美作守清宗の娘で、細川眞之、三好長治、十河在保の母と書かれているものもみられます。

こぼれ話・その三

一説には、長房の妻は証如の娘でその間には四男一女を儲けています。上桜合戦の際に長房は長子・大和守長重（腹違いの子で義賢の娘を娶る）以外の妻子を石山本願寺に逃したようです。このとき、攻め手に加わっていた雑賀衆が協力したとも言われています。

『昔阿波物語』

十河在保と雑賀衆

1581 年に長宗我部元親に対抗し、十河在保が阿波に入ろうとしたとき、雑賀衆が加わっています。十河在保は、三好長治が細川眞之との争いで自害し、廃絶した阿波三好家に戻り、阿波守護代となっていました。在保の阿波入国に関しては前述の篠原自遁が反対したとの話も残っています。

徳島県下の一向宗

一向宗の寺としては四国で最古といわれる安楽寺（美馬市郡里）には、1520 年に千熊丸（三好元長）による寺領安堵と召帰しの状と篠原大和守長政（長房の父）が、住職に誓約した文書が残っています。また、石山合戦では、本願寺からの援助の要請に対して安楽寺から粟三石と金二十両が石山本願寺に送られました。

藍住町に残る顕如の画幅

藍住町には、東中富の光善寺（浄土真宗）に 1581 年に顕如が署名し、自筆で描いたとされる『親鸞聖人一代記』四幅（町指定）が残っています。もともとは讃岐（香川県）に渡っていたものを持ち帰ったもののようです。

参考文献
『四国史料集』人物往来社
『戦国鉄砲・傭兵隊』鈴木眞哉　平凡社
『戦国三好一族』今谷明　洋泉社
『図説 徳島県の歴史』河出書房新書
『戦国の覇者三好家と十河一族』谷口秋勝

ご協力
須藤茂樹氏・正恩寺（小田原市）・圓通寺（草津市）

問い合わせ先
藍住町教育委員会　社会教育課
勝瑞発掘現場事務所
TEL・FAX (088)641-3466
URL:http://www15.ocn.ne.jp/~shouzui/
E-mail:syugomachishouzui@air.ocn.ne.jp